

高校生が聞く「裁判官の素顔」



東京地方裁判所判事補

加藤学

東京地方裁判所八王子支部判事補

岡部純子

女子学院高等学校 3 年生

倉田あや

同

山路理葉

同

小宮麻祐子

・裁判所，裁判官のイメージ



岡部

皆さん，高校３年生ということですが，法学部志望なんですか。

小宮

私は，全然違って外国語学部に進むことを考えています。ただ，法律にもとても興味があるので，今回，招いていただいてとてもうれしいんですけど（笑い）。

倉田

私は，法学部志望です。

山路

私もそうです。

加藤

法学部志望ということは，法曹になることを考えていらっしゃるんですか。

倉田

私は，今は，行政官庁に勤めたいと考えているんです。司法試験はとても大変そうなので，敬遠してしまうんですけども。

加藤

私も高校生のころは法曹になるのは無理だろうと思っていたときもあったけれど，やってみれば何とかになりましたね。

山路

私は，中学の公民の授業を受けてからずっと弁護士になりたいと思っています。

岡部

私の主人も裁判官なのですが、やっぱり中学の公民の授業を受けて裁判官になりたいと思ったそうなんです(笑い)。皆さんは、裁判官について、どういうイメージを持っていますか。

山路

何かよく分からないんですけど。

加藤

あんまり身近に考えられないという感じがあるのかな。弁護士や検察官だったら、大体こういうことをやるというのが思い浮かぶけど、裁判官はそういうのが浮かんでこないんですかね。

山路

そうですね。

岡部

テレビドラマにも、裁判官が主人公のものはあまりないですよ(笑い)。

加藤

私は、それが前から不満だった(笑い)。最近は少し出てきてますけどね。小宮さんはどうですか。

小宮

裁判所にはちょっと硬いイメージがあります。

加藤

裁判官は、堅苦しいですかね(笑い)。

岡部

そんなに、すごくまじめな人ばかりってことはないですよ。意外といろんな人がいて、面白いですね(笑い)。

・裁判官を志したきっかけ



小宮

法曹界のお仕事に就こうと思ったのは、どのようなきっかけだったんですか。

加藤

一番には、自分の判断で仕事をやりたいという気持ちがあって、上司の命令でしか動けないような所には合わないかなと思ったことがありました。それで、皆さんくらいの時期に法曹界に進みたいと決めて、法学部だけ受験したんですよ。

岡部

私の場合は、父が弁護士なので、初めから法曹界は何となく身近ではあったんですけども、高校生のときには職業にしようとはあんまり考えていなくて、どちらかというとしてきな人と結婚できたらいいなという気持ちの方が強かったんですけど(笑い)。ただ、父の影響で、大学は法学部に進みました。大学生のときも、親に言われるまま司法試験を受けるのも何となく釈然としなくて、ずっとどうしようかと悩んでいたんです。それで、勉強しても余り身に入らない時期がとても長かったんですが、就職活動をしてみて、やっぱり女性が仕事をしていくには資格がある方がいいかなと思って、そこで本当に司法試験に合格したいなと初めて思ったんですよ。初めから目標があつてというのとは、大分違ってましたね。

小宮

なぜ、弁護士や検事ではなく、裁判官になることにしたんですか。

加藤

私は、もともと弁護士希望で、当事者といろいろ一緒にやっていくという弁護士に魅力を感じるところもあったんだけど、最終的に判断を下すのは裁判官なんだから、

そこをやってみたい、やっぱり判決を書きたいと思って、そのまま裁判官になって、今年で8年目です。

岡部

私は、裁判官になって6年目ですが、最初は志望は余り決めていなかったんです。裁判官というと、ただ法律をそのまま適用する、すごく堅苦しいことをやるという印象が強かったんですけど、司法修習生になって裁判所で修習したときに、実際には、事件で来た人の気持ちや、その人のその後の人生だとか、世の中がこれからどうなっていくかとかを考えながら裁判をやっているのが分かったんですよね。そういう人間味があるところと理屈を考えると両方ある職業だな、その点がとてもいいなと思ったのが一番の理由ですね。

倉田

裁判所では、女性であることは何の障害にもならないで、やっていけるんですか。

岡部

今日は、多分それを聞かれるだろうと思って、裁判官になってから女性であるということに嫌な思いをしたことがあるかなと、一所懸命考えたんですけど、思い当たらないですね。

加藤

司法試験の女性合格者も増えてきて、法曹界にもかなり女性が進出していますね。

岡部

女性の裁判官の割合は、今は全体の10パーセントくらいですけど、だんだん増えているんですよね。

小宮

やっぱり大学は法学部を出ないと駄目なんですか。

岡部

そんなことはないですよ。

加藤

経済学部出身や文学部出身で司法試験に受かっている人もいるし、大学を出ていなくて受かっている人もいますね。

岡部

例えば、結婚して、子供を育てて、完全に家庭に入っていた人が、ある日突然奮起して勉強して、司法試験に受かったなんていう話も聞きますね。司法研修所ではいろんな人がいて、とても面白かったですね。

・裁判官の日常生活



倉田あやさん



山路理葉さん



小宮麻祐子さん

小宮

いつも何時ごろ、自宅にお帰りになるんですか。

加藤

私の場合は、7時半くらいには家に着くようにしています。やっぱり子供がいるんで、食事はできるだけ子供と一緒に取って、子供をお風呂に入れて、その後、おもむろに持ち帰った事件の記録を読む・・・(笑い)。

岡部

私も、子供がまだ1歳半なので、5時過ぎには職場を離れますね。
ただ、裁判官の仕事はある程度家でやれる仕事が多いので、仕事を持ち帰って、家で子供が寝た後に仕事をしたり、いろいろ工夫しています。でも、裁判官には、割といいお父さんが多いですよ(笑い)。

加藤

裁判官もカラオケに行くんですか、なんていう質問が出るかと思ったんですけど(笑い)。

小宮

行くんですか。

加藤

私は大好きです(笑い)。

・裁判官の仕事の厳しさとやりがい



加藤判事補



岡部判事補

小宮

裁判官というのは仕事が厳しいし忙しいようですから、ストレスがたまりませんか。

加藤

ストレスがたまるっていいことはないですね。ストレスを感じることはもちろんあるんですが、それは、多かれ少なかれ、どの職業でもあるんじゃないでしょうか。

岡部

結論を悩んじゃって、悩み疲れるというように感じることはありますけれど、最終的には自分で結論を決められますよね。だから、ストレスというのとは違うし、ストレスは少ない職業じゃないんですかね。そう思いますね。

加藤

普通の職場に行ったら、私くらいの年であれば、自分では本当はこっちがいいんだと思っても、上司がいや駄目だと言えば、それで終わっちゃうんでしょうからね。裁判官の場合、そういう意味でのストレスはないですね。裁判官が一人で処理する単独事件なら自分で正しいと思う結論を出せばいいし、3人の裁判官で処理する合議事件の場合でも、3人で話し合っているうちに、落ち着くようなところに落ち着いていきますからね。

倉田

でも、それはかえって責任が重いということですよね。例えば、刑事事件だと、自分の決定がその人の人生を左右するわけですよね。私は、そういうことをするのがすごく怖いというか、そういうことをする立場になるとすごく悩まないかなと思いますが。

加藤

確かに悩むことももちろんあるわけなんで、その面をとらえると、ストレスとも言えるんですが。ただ、それが逆に裁判官の仕事の面白いところ、やりがいを感じる場所でもありますね。

小宮

例えば刑事事件の場合だと、検事さんと弁護士さんの言うことがいろいろごちゃ混ぜになって対立する中で、何が真実かを見抜かなきゃいけないわけで、裁判官の仕事はなかなか普通の人ではできないんじゃないかと思うんですけど。

岡部

裁判官は、真ん中に座って両方から言い分を聴くんですよね。とても一所懸命聴く、一所懸命聴くというのがすごく大事なんですけれど、そうすると思った以上に分かることが多いんですよね。私、裁判官の仕事ってとても面白いと思いますね。

加藤

もちろん、いくら考えてもなかなか分からない事件というものもあるんだけどね。

・社会の良識をバックに



倉田

裁判官の仕事には人間味のあるところもあるという話が出ましたが、主観や感情を取り除いて裁判をすることができるのでしょうか、難しそうだなと思ってたんですけど。

加藤

確かに個人的な感情のままに裁判をやるわけにはいかない。ただ、普通の人から見てこういうのはひどいよというのは、やっぱり、ひどいよという判決にしないとおかしいんじゃないかなというのは考えます。もちろん、それが法律的に説明がつかないといけないわけなんだけれども。

岡部

法律をどういうふうに応用していくかについては、個人の価値観というより社会的な良識というものにちゃんと沿っているかどうかをすごく考えますよね。

倉田

最高裁判所の裁判官には裁判官出身でない外交官出身などの方も多いのは、どうしてなんですか。

加藤

やはり、各界での広い識見を最高裁判所に持ってきてほしいからじゃないかな。

倉田

そういうふうに別の世界から人が入ってきて裁判をするというのはとてもいいことだと思うんですけど、広い識見を持った人が必要だというのは何も最高裁判所に限っ

たことじゃないと思うんです。なぜ最高裁判所だけそういうふうになっているんですか。

加藤

下級裁判所でも別な形で工夫がされてるんですよ。簡易裁判所では司法委員といって、人格識見に優れた一般の人を選んで、裁判に立ち会ってもらって参考意見を聴いたり、和解を助けてもらったりしているし、家庭裁判所や地方裁判所では、調停委員といって、やはり一般の人を選んで、調停を担当してもらったりして、一般の人にも裁判に参加してもらい、その知識、経験や良識を生かしてもらおうとしているんですよ。また、裁判官にも、広い識見を身に付けさせようということで、若手を、マスコミや民間企業に派遣して研修させたり、行政官庁に出向させたり、留学や在外公館の勤務を経験させるなどしていますね。

・親しみやすく身近な裁判所

倉田

実際の裁判もテレビでドラマ化されている刑事裁判のような格好いい、すごく緊迫した感じなんですか。

加藤

よくテレビドラマでやっているんですが、裁判長が「静粛に。」と言って、コンコンと木づちで机をたたくなんてことはないですね。今の日本の裁判所では木づちなんていうものは使わないからね。刑事事件でも、普通は粛々と進んでいく事件の方が多んじゃないかな。被告人が罪を認めている事件の場合、裁判所も弁護人が被告人の情状を述べるということになると、それは最大限聴いてみましょうという形でやりますからね。

岡部

民事裁判でも、皆さんが思っているよりは普通に、日常的に、やっているのではないかと思いますね。例えば、判決文でも特別な表現などは使わないようにして分かりやすい文章を書くように心掛けているし、まして法廷で話したりするときには普通の言葉で話すようにしてるんですよ。

加藤

民事裁判の場合は、最近では、皆さんがテレビでよく見る法廷とは大分違って、法廷の真ん中にラウンドテーブルというだ円形の大きなテーブルを置いて、それを囲んで裁判官、当事者、弁護士が座って裁判を進めていくということもやっているんですよ。また、裁判は分かりにくい、時間や費用が掛かると言われているので、裁判を利用しやすく分かりやすいものにしようということで、最近、民事訴訟法を改正したりもしているんですよ。

・少年事件について

小宮

加藤裁判官は、少年事件を担当したことがあるそうですが、少年事件というのは、ほかの事件と比べると、何か違いがありますか。

加藤

少年事件の場合は、いかにして少年を立ち直らせるかということに主眼を置いています。だから、裁判をする前にも、家庭裁判所調査官という人がいて、その少年の生育歴を調べたり、少年から話を聴くだけでなく、両親に会って話を聴いたり、必要があれば学校の先生に話を聴いたりして、本当になぜ少年がその非行をしたのかを調べた上で、少年を更生させるにはどうしたらいいのかということを考えるわけですね。そういう点では、普通の裁判よりは、裁判所が能動的になって、いろいろ働き掛けたりするから、すごく好きというか、面白い仕事だと思います。

小宮

最近、いじめの問題とかが、深刻化していますよね。私は、個人的には、いじめた経験も、いじめられた経験も多分ないと思うんですけど。何か、最近、いじめた側の子を擁護する考え方というのが強いような気がして、少年とはいっても、もうちょっと厳しくなった方がいいんじゃないかと思ったりします。

山路

私も自分たちの同世代を見てて、麻薬というか、そういうのを吸っている子が増えてきたとか考えると・・。

岡部

もう少し厳しくした方がいいと思われませんか。

山路

そうですね。

加藤

皆さん誤解されてるんじゃないかと思うんだけど、少年だから軽いかというと、必ずしもそうじゃない。少年事件の場合は、その少年に必要な保護を加えるということをや

るから、そこは違うと思うんだよね。例えば、交通違反なんかだと、大人だったら罰金を払って終わる。少年の場合は、裁判所に呼ばれてまる1日講習を受けたりするだけじゃなくて、場合によっては保護観察になることもある。そうすると、少年の方が単純に軽いとは言えないんじゃないかな。

岡部

本当に、いじめのこととか、薬物だとか、少年の事件って難しいテーマが多いですね。私も、今、子どもがまだ1歳半なんですけど、皆もっとちゃんと育つようにしてほしいなと切実に思いますね。

・おわりに



椿咲く丘(富永直樹作)

最高裁判所大ホールにあるブロンズ像

山路

今回、お話をさせていただいて、遠かった裁判所が私にとってはかなり近くなって、弁護士志望をどうしようかなと、ちょっと考えているんですけど(笑い)。本当にもっと近くなるには、裁判所の方の努力はもとより、私たちの側ももっと裁判所を利用しよう、もっと興味を持っていかねばいけないなと思いました。

岡部

そう思っただけだと、うれしいですね。

加藤

今日は、本当に長い間ありがとうございました。